意志気質検査の要因分析的研究*

山口大学

久 芳 忠 俊**

I 問 題

知能が一般に学業成績と密接な関係を有っていることは改めていうまでもない。然し知能検査の結果、知能の優秀者と判定されるものに、学校における学業成績が悪かつたり、また略同一の学習能力を有っていると認められるものの間に、一人は落着いて作業を行うのに、他のものはいらいら興奮して仕事をやり、一人は確実に著々とやるのに、他の児童生徒は不確実に思い出したように急進的にするような場合がある。これらは知能や学力では説明できない作業に伴う気質性格の個人差と考えるのが妥当であろう。その他一つの問題に出会ったとき、それを解決するに当って自信のあるものと、自信のないもの、日常生活において大体快活に傾くものと、憂鬱に傾くものと、或は急に愉快に躁ぐかと思うと、突然不快に沈黙に陥るもの、他人に対して一般に民主的寛仁なものと無慈悲なもの、怒りっぽいものと容易に怒らないもの、他人の仕事に対して忠実なものと不忠実なもの、他人と交つて誠実なものと不誠実なもの、何事に対しても進取的なものと退嬰的なもの、一般に多辯的なものと寡言的なもの、更に決断の速いものと遅いものというように対立的な概念として言い表わされることのできる人間の特質は一般に気質或は性格の差異を表現したものである。

一般に人格の一部を形成する気質という場合は個人の感情的素質、即ちその個人に固有な感動的傾性を意味し、性格という場合は個我が環境に対して、いかなる行動の方向、或は態度をとるかを規定するところの内在的一般的機能、即ち心的方向素質、或は生活上の全体的態度素質を意味する。性格は方向が明らかに現われているが気質にはそれが明らかでない。例えば内向的態度、或は外向的態度という場合には性格の特質を言表わしたも

のであるが、興奮性とか、苦勞性、進攻性等は気質の特質である。かように概念的には気質と性格とは一応区別することはなし得られるが、然し日常の實際生活の場においては気質と性格とを峻別し得ないことが甚だ多い。それであるから、これを情意的素質或は意志気質性格というように一括して取扱うことが妥当ではないかと思われる。

以上のように一応気質性格が概括されたとして児童生徒の、広くは人間一般の気質性格が教育や時間的経過に伴う発達によつて変動するものであるかどうか、これに対して或る学者は気質性格は先天的な素質であつて経験によつて変動し難いものとしている。これに反して或る学者は気質性格は決して先天的なものではなく経験によつて発育中に漸次固定化し習慣となつたものであると説いている。然し吾々が日常観察する多くの児童生徒の気質性格は先天的遺伝的傾性が生後の経験と輻輳して発達したもので、どれだけが先天性でどれだけが経験や訓練によつて変化したものであるかは見分け難いのである。何れにしても吾々がここで注意しなければならないことは、現象的な感情意志からその個人に固有な比較的永続的な情意的特質を絶対的な特性であるとする考え方である。若しそうだとすると教育や訓練の必要を否認することになる。例えば一人の生徒がある事柄について比較的怠惰であるならば、彼は永久に怠惰であると信じたり、或は他の生徒が或る作業に教師の面前で勤勉であるならば、彼はいつでも勤勉であると信じたり、見掛けが快活であるならば永久不変に快活な性質をもっているかのように考えることは情意的性格を絶対的な特性であると考えことから生ずる誤解である。然しここで問題とするところは気質性格は先天的か訓練や教育によるか、変化するものであるならば、如何なる要素によるかというような本質的なものではなくて、現象的に日常生活の場において児童生徒がどのような情意性格を現わしているかを桐原式意志気質検査の因子分析の結果から逐年の(5カ年)にどのように変動をもたらすかを探索せんと

* A factor-analytical study on The Will-Temperament Tests

** by Kuba, Tadatoshi (Yamaguchi University)

したものである。

従つて年齢の異なる児童生徒の平均値を連結した結果に基づき、そこに発達過程を想定したものと異なり一人の推移変動に基づいたものである。

II 調査目的

1) 概括的な目的は意志気質検査の要因的研究により児童生徒の逐年の変動の探索。

2) 従来の研究は年齢の異なる別々の集団を測定して、その年齢的差異を明らかにしたものが多かったが、ここでは同一被験者について5カ年継続して精神測定を行い年齢的推移そのものの観察。

III 調査方法

1) 被験者山口大学附属校及びその他の小、中学校の児童生徒、昭和25年度小学5年生29年度中学3年生、当初は約100名であつたが途中転出入学のため男女合計60名

2) 検査用具、桐原式改訂意志気質検査実施期毎年一学期中頃。

IV 結果

1) 逐年毎の一致度

一般に何れの検査においてもそうであるが特にこの種のテストにあつては被験者の極めて僅かの気分とか外部の状態によつて、その結果に影響を与えるものである。従つて逐年毎の検査の一致度を見るために相関法により算出し、その平均とすることは妥当であるか否か疑問であるが一応平均値を算出して、従来研究されていた古賀、桐原の結果と比較してみると Table 1 のようである。

以上のように毎年における一致度は略著者の場合と著しい相異は見られなかつたが、然し或る年齢における或る検査には偶発的な相関を示した。例えば(検査10)において(10~11才)の0.50 に対して(11~12才)の0.80

Table 1 逐年毎の一致度(信頼度)

検査 年齢	1	2A	2B	2B/A	8A	8B.C.D	9	10	3C	5	6	7
10 ~ 11才	0.49	0.39	0.35	0.32	0.43	0.60	0.25	0.50	0.80	0.36	0.33	0.20
11 ~ 12	0.46	0.28	0.31	0.35	0.40	0.47	0.40	0.80	0.76	0.39	0.56	0.15
12 ~ 13	0.35	0.30	0.34	0.30	0.47	0.21	0.22	0.40	0.52	0.26	0.35	0.21
13 ~ 14	0.31	0.33	0.38	0.13	0.41	0.57	0.68	0.70	0.63	0.34	0.40	0.24
平均	0.403	.325	.345	.327	.427	.463	.387	.600	.677	.337	.410	.200
古賀	.701	.270	.640	.528	.548	.450	.567	.528	.927	.434	.648	.451
桐原	.458	.212	.351	.312	.454	.414	.327	.512	.785	.230	.501	.269

Table 2 相互相関表(10才男子)

	決断	動作	運動	比	拡張	駆御	自信	決定	抑制	精密	細心	執心
決断	(0.763)	0.255	0.166	0.125	0.243	0.201	0.366	0.393	0.500	0.333	0.763	0.326
動作	0.255	(0.650)	0.514	0.650	0.374	0.624	0.125	0.246	0.346	0.361	0.380	0.260
運動	0.166	0.514	(0.841)	0.841	0.388	0.253	0.170	0.450	0.274	0.588	0.383	0.140
比	0.125	0.650	0.841	(0.841)	0.150	0.245	0.400	0.232	0.833	0.625	0.205	0.312
拡張	0.243	0.374	0.388	0.150	(0.612)	0.612	0.208	0.474	0.433	0.500	0.266	0.144
駆御	0.201	0.624	0.253	0.245	0.612	(0.624)	0.360	0.101	0.550	0.300	0.323	0.266
自信	0.366	0.125	0.170	0.400	0.208	0.360	(0.700)	0.208	0.700	0.560	0.426	0.254
決定	0.393	0.246	0.450	0.232	0.474	0.101	0.208	(0.510)	0.166	0.454	0.510	0.276
抑制	0.500	0.346	0.274	0.833	0.433	0.550	0.700	0.166	(0.833)	0.611	0.180	0.581
精密	0.333	0.361	0.588	0.625	0.500	0.300	0.560	0.454	0.611	(0.810)	0.810	0.300
細心	0.763	0.380	0.383	0.205	0.266	0.323	0.426	0.510	0.180	0.810	(0.810)	0.602
執心	0.326	0.260	0.140	0.312	0.144	0.266	0.254	0.276	0.581	0.300	0.602	(0.602)
Σr	4.434	4.785	5.008	5.459	4.404	4.459	4.477	5.020	6.007	6.252	5.658	4.063
F_1	0.576	0.622	0.651	0.709	0.572	0.579	0.582	0.522	0.780	0.812	0.735	0.528

$$\Sigma r = 59.026 \quad \sqrt{\Sigma r} = 7.68283 \quad \frac{1}{\sqrt{\Sigma r}} = 0.13016037$$

Table 3 廻転後の因子行列 (10才)

性	検査 因子	決断	動作	運動	比	拡張	駆御	自信	決定	抑制	精密	細心	執心	k ²	廻転
男 子	F ₁ '	0.032	0.232	0.089	0.162	0.430	0.007	0.628	0.026	0.004	0.530	0.884	0.427	16.000	F ₁ ~ F ₃
	F ₂ ''	0.159	0.005	0.141	0.005	0.331	0.011	0.694	0.039	0.069	0.519	0.897	0.507	16.400	F ₁ ' ~ F ₃
	F ₃ ''	0.473	0.387	-0.041	0.005	0.020	0.796	0.061	0.424	0.472	0.229	0.201	0.206	12.930	F ₃ ' ~ F ₄
	F ₄ ''	0.628	0.002	0.201	0.094	0.288	0.064	0.022	0.407	0.896	0.415	0.028	0.356	14.992	F ₄ ' ~ F ₁
	h ²	0.645	0.204	0.070	0.035	0.378	0.638	0.880	0.348	1.030	0.775	1.622	0.609		F ₄ ' ~ F ₁
女 子	F ₁ '	0.595	0.023	0.094	0.541	0.094	0.003	0.202	0.258	0.099	0.791	0.538	0.084	14.000	F ₁ ~ F ₂
	F ₂ ''	0.577	0.095	0.087	0.205	0.006	0.098	0.377	0.402	0.085	0.688	0.319	0.054	10.725	F ₁ ' ~ F ₃
	F ₃ ''	0.482	0.074	0.458	0.014	0.584	0.375	0.065	0.024	0.436	0.502	0.007	0.832	17.233	F ₃ ' ~ F ₄
	F ₄ ''	0.065	0.068	0.405	0.899	0.490	0.071	-0.076	-0.040	0.466	0.356	0.759	0.392	19.683	F ₄ ' ~ F ₁
	h ²	0.924	0.020	0.390	1.331	0.590	0.155	0.193	0.230	0.424	1.578	0.967	0.853		

の場合ようである。この偶発的一致度の解答は一義的には言えないであろうが、この検査自体が信頼度のあるものとして考えるならば該当年令に関してその検査項目は適当であつたと言えるであろう。然しここで検査の信頼度や妥当性の限界等を検討しようとするのではなく、児童生徒が毎年どのような相関々係のもとで検査を行っていたかを観察したのみである。

Table 2 は検査における各項目間の相互相関表 (10才

Fig 1

男子) を一例として示したものである。

2) 関係座標の廻転

廻転後の因子行列に吟味を加えて年令的推移変動を観察すると Table 3, 4, 5 のようである。但しここでは (k²) の高いもの夫々二個について考察することにした。

(a) 10才男子の (F₂'') では眼と手との協応の働きから精密細心を検する場合、細密への関心の大小、つまり作業をするに当つて大まかに見当を以つてするか、或は

Fig 2 F₂' ~ F₃ の廻転 (10才男子)

周密丁寧にするかという精密細心において因子負荷量が高い、それと同時に自信力(0.694)という気質性格とも深い関係をもっている。更に(F_1')を取つてみても殆んど同様なことがいえる。決断、動作、運動等一般に速度を検するような場合は要因(F_2''), (F_1')共に負荷量が低く、従つて10才という比較的年少時の男子では意志プロフィール(Will-Profile)から考えれば思慮型のものが多く、一般に精密、細心、執心等の要因によつて気質性格がえられ、更に拡張(0.331)とも相互に働き合っている。これらの関係を図示すれば Fig 1 のようである。

次に女子10才時について(F_4'')及び(F_3'')を取つてみると(F_4'')では細心(0.759)と(0.899)比が他の因子と比較して大きく関係し合っているが、然しこの意志気質における(検査2)の(比=Bの数に対するAの比を百分比とする)の意味が疑問なのである。何故ならば(検査2)におけるA, Bは夫々生のままの検査結

果より意味が生ずるのであるが(比)はBに対するAの関係を示しているので生の検査から意味が得られない、それであるから間接的には運動、動作の速度を表現しているとしても直接的には表現しているとは言えないからである。(F_3'')では執心(0.832)が大きく支配的であるが、その他は(F_4''), (F_3'')共に略同程度の負荷量で関与している。従つて男女10才時にあつては男女間に存する差異は大してみられず何れも意志プロフィールからすれば思慮型に属し運動型、進取型は消極的であると言える。Fig 2 は10才男子における $F_2' \sim F_3$ の廻転の一例である。

(b) 男子12才時の(F_1')及び(F_4'')をとつて検討すれば(F_1')では10才時におけると同様に精密(0.850)が最も高く、それに次で抑制(0.642)が新に附加され、その他では殆んど同程度に関与し、拡張(0.254)動作(0.128)と相互関係を有している。(F_4'')では(F_1')の場合とは略反対な様相を示して、運動(0.718)を中心と

Table 4 廻転後の因子行列 (12才)

性	検査 因子	決断	動作	運動	比	拡張	駆御	自信	決定	抑制	精密	細心	執心	k_2	廻転
男 子	F_1'	0.074	0.128	0.026	-0.085	0.254	0.056	0.068	0.059	0.642	0.850	0.466	0.536	15.448	$F_1 \sim F_3$
	F_2''	0.003	0.185	-0.082	0.332	0.027	0.334	0.024	0.308	0.102	0.214	0.248	0.033	3.924	$F_2' \sim F_4$
	F_3'	0.212	0.013	0.497	0.016	0.405	0.006	0.333	0.080	0.010	0.037	-0.128	0.635	8.290	$F_3 \sim F_4$
	F_4''	0.276	0.284	0.718	0.385	0.039	0.081	0.561	0.083	-0.013	0.497	-0.001	0.478	13.549	$F_3' \sim F_4'$
	h^2	0.127	0.131	0.770	0.266	0.231	0.121	0.431	0.112	0.423	1.017	0.290	0.920		
女 子	F_1'	0.730	0.098	0.080	0.213	0.839	0.487	0.591	0.018	0.075	0.168	0.760	0.005	20.800	$F_1 \sim F_2$
	F_2''	0.022	0.406	0.606	0.891	0.093	0.693	0.093	0.238	0.678	0.092	0.152	0.007	19.775	$F_2' \sim F_3$
	F_3''	0.095	0.834	0.550	0.245	0.039	0.145	0.487	0.358	0.047	0.090	0.465	0.095	13.486	$F_3' \sim F_4$
	F_4'	0.489	0.207	0.064	0.031	0.561	0.028	0.030	0.773	0.575	0.521	0.064	0.466	16.868	$F_3' \sim F_4$
	h^2	0.782	0.913	0.680	0.900	1.027	0.739	0.595	0.782	0.799	0.316	0.821	0.226		

Table 5 廻転後の因子行列 (14才)

性	検査 因子	決断	動作	運動	比	拡張	駆御	自信	決定	抑制	精密	細心	執心	k^2	廻転
男 子	F_1'	0.019	0.582	0.890	0.089	0.310	-0.022	0.704	0.360	0.736	0.315	0.067	0.098	20.965	$F_1' \sim F_2$
	F_2''	0.352	0.003	0.239	0.363	0.480	0.417	0.067	0.018	0.157	0.002	0.001	0.682	10.097	$F_2' \sim F_3'$
	F_3''	0.688	0.009	0.270	0.008	0.013	0.654	0.025	0.716	0.002	0.668	0.661	0.145	19.930	$F_3' \sim F_4$
	F_4'	0.211	0.490	0.309	0.456	0.027	0.098	0.572	0.063	0.319	0.077	0.031	0.319	9.499	$F_1 \sim F_4$
	h^2	0.642	0.490	1.017	0.348	0.327	0.612	0.828	0.647	0.668	0.551	0.442	0.598		
女 子	F_1'	0.291	0.808	0.886	0.501	0.006	0.090	0.002	0.279	0.042	0.443	0.607	0.004	20.216	$F_2 \sim F_3$
	F_2''	0.006	0.669	0.883	0.555	0.024	0.249	0.185	0.035	0.050	0.475	0.261	0.082	16.135	$F_2' \sim F_3$
	F_3''	0.239	0.192	0.175	0.019	0.319	0.729	0.071	0.276	0.012	0.007	0.076	0.859	13.193	$F_3' \sim F_4$
	F_4''	0.084	-0.101	0.035	0.422	0.759	0.379	0.950	0.087	0.461	0.325	0.050	0.095	17.965	$F_4' \sim F_3'$
	h^2	0.149	1.147	1.597	0.737	0.678	1.424	0.952	0.163	0.217	0.528	0.445	0.754		

して決断(0.276)動作(0.284)比(0.385)のような決断の速さ、運動の速度、速度、能力等を現わす要因が支配的である。而してそれらに關係する他の要因として精密(0.497)執心(0.478)が相互にからみ合っている。意志プロフィールから考察すると相称的で(F_1')では思慮型であるが(F_4'')では運動型となつている。

12才女子では(F_1')と(F_2'')を取つてみると、意志動作が進出的か退嬰的か、発進的か抑止的か、或は誇張的か萎縮的か、妨害によく抵抗して動作をよく進発せしめて行くか否かを運動衝動における駆御の強弱によつて見るところの拡張(0.839)を中心として駆御(0.487)と関連していると同時に決断速度(0.730)細心(0.760)とも深く關係を有している。(F_2'')においては比(0.891)で積極的ではあるが前述のような理由で保留することにして他の要因即ち運動(0.606)駆御(0.693)抑制(0.679)等が中心となつている。意志プロフィールからすると(F_1')では進攻型となつているが(F_2'')では比較的運動型に近いものとなつている。従つてこの年令では男女共にはつきりした意志プロフィールを捉えることは困難である。次に14才時についてみるとTable 5のようである。

(c) 14才男子の(F_1'')及び(F_3'')をとつてみると先ず(F_1'')では運動速度(0.890)が積極的で自信力(0.704)抑制(0.736)がそれに次で高い関与度を示している反面では細心、執心等の要因は姿を消失して、何れかと言うと進攻型に接近していると考えられる。

(F_3'')においては略同程度に決断(0.688)駆御(0.654)決定(0.716)精密(0.663)細心(0.661)と言うように要因が相互に關係し合ひ(F_1'')においても(F_3'')においても強い意志プロフィールの範疇に枠づけることは困難なようである。

女子の(F_1')と(F_4'')を取つて考えてみると(F_1')では動作の速度(0.808)運動の敏速性(0.886)を中心に積極的に運動を示している。更にそれと精密(0.443)細心(0.607)とが相互に引つ張り合つている。進攻型の要因はその影をひそめている。(F_4'')では負荷量が夫々(0.950), (0.759)であるところの自信力とか拡張、それに次で駆御(0.379)が重要な要素をなしている。而してこの場合は(F_1')におけるとは対照的に運動性や思慮性は消極的で却つて進攻性が積極的となつている。ここでも男女の明確な区別は見出されないのであるが、ただ男子の(F_1')と女子の(F_4'')とを比較してみるとプロフィールの上から進攻型を示していると言う類似を発見するのである。

以上各年令毎の男女を個別的に要因の上から吟味した

のであるが、これを概括的に言うならば年少時の10才頃では思慮を示す要因が支配的であるのに対して運動の速度、決断速度等の要因は比較的消極的である。12才、14才頃ではどのような要因が気質性格において支配的であるかは容易には把握されず従つてそれ以後の年令になつてもつと明確なものが形成されるように思われる。

3) 類型上の逐年的変動

意志気質検査から得られた各個人の得点を百分段階の相当位置にとり、比較的位置における一種の横断面としてみる場合には各人各様の曲線が生まれる。これが意志プロフィールと呼ばれているものである。この意志プロフィールは各人各様であるけれども大体の傾向から類型に分類されたものが意志気質類型と呼ばれているものである。即ち全体的な百分段階の高さから見て段階が一般普通人である中央よりも上位にあるものを積極型、それに反して全体として普通よりも下に位するものを消極型、積極消極相交錯している場合の不定型と三個の類型に分類されたものである。而して積極型に属するものは衝動が強く、合目的な意志的調整に優れ動作も敏速であり、思慮深いものである。これに反して消極型のものは決断、動作に敏活を欠き意志調整の劣つたしかも精密細心等思慮に欠けていると言う特性を示すものである。今以上の観点から逐年的にどのように変動したかを観察してみるとTable 6のようである。

積極型を5カ年間もち続けたものは男女夫々1名宛でその他は途中で消極型か不定型かに変動を行つている。消極型では男2名、女1名のものが終始もち続けているがその外は途中において積極か不定に変化をもたらしている。不定型の場合は最もその数が多く不定型を終始もち続けている場合も相当見出されるのであるが実に千差万別で複雑を極めてゐる。これらの変動が何れの原因に基づくかは一義的には論議されないと思うが、この時代は精神機能の急速な発達及び青年期の入口であること、更に検査時における被験者の状況によつて結果に反映したことによつたものと思われる。

4) 検査の性質上の類型における逐年的変動

決断の速さ(検査1)、動作の速度(検査2A)、運動能(検査2B)及び後の者の比において比較的高い段階にあつて、その他のものにおいて段階の低い運動型、検査作業中進攻性を示すところの拡張度(検査8)、意志的運動駆御(検査8B, C, D)自信の強さ(検査9)、決断の決定性(検査10)において比較的高い段階にあつてその他のものにおいて低い段階に在る進攻型、運動抑制(検査3C)、目と手との協応の精密さ(検査5)細密への関心、細心度(検査6)、一つの仕事への執著心(検査

Table 6 類型上の逐年的変動

型	性 年 令			男 子					女 子									
				10才	11	12	13	14		10	11	12	13	14				
積極男 4人女 3人	伊	○	○	夫	積→	積→	積→	積→	積	鈴	○	○	子	積→	積→	消→	消→	積
	高	○	○	彦	積→	不→	不→	不→	不	西	○	○	子	積→	積→	積→	積→	積
	久	○	○	助	積→	積→	不→	不→	不	中	○	○	代	積→	積→	不→	不→	消
	青	○	○	市	積→	消→	積→	不→	積									
消 極 男5人 女6人	池	○	○	郎	消→	消→	消→	積→	積	沢	○	○	子	消→	消→	消→	消→	消
	渡	○	○	雄	消→	消→	消→	消→	消	佐	○	○	江	消→	消→	消→	積→	積
	前	○	○	夫	消→	消→	消→	消→	消	大	○	○	子	消→	不→	不→	不→	不
	東	○	○	明	消→	消→	不→	不→	不	野	○	○	子	消→	消→	不→	消→	消
	玉	○	○	一	消→	消→	消→	積→	積	中	○	○	枝	消→	消→	消→	積→	積
	宮									宮	○	○	子	消→	消→	消→	消→	不
不 定 男21人 女21人	鈴	○	○	司	不→	不→	不→	不→	不	長	○	○	子	不→	不→	不→	不→	不
	坂	○	○	治	不→	不→	消→	消→	不	内	○	○	子	不→	不→	不→	積→	積
	新	○	○	道	不→	不→	不→	積→	積	永	○	○	江	不→	不→	不→	不→	不
	西	○	○	夫	不→	不→	不→	不→	不	村	○	○	子	不→	不→	消→	消→	消
	吉	○	○	男	不→	消→	消→	不→	不	本	○	○	子	不→	不→	消→	消→	不
	中	○	○	俊	不→	不→	不→	消→	積	松	○	○	子	不→	消→	消→	不→	不

〔注〕 千差万別であるので不定型は6名宛にして残りは省く

7) において比較的高い地位を占めその他において低いものを思慮型、前三者が混合している混合型及びプロフィールにおける曲線の屈曲が不規則な不定型とに区別せられる。今これらの型に該当するものが5カ年間にどのように変動したかを個別的に述べることは複雑で各人各様であるので実数について見ると Table 7 のようである。

Table 7 検査の性質上における類型の逐年的変動

	10才		11才		12才		13才		14才	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
運動型	0	0	0	2	3	6	6	8	6	6
進攻型	0	0	2	1	5	3	7	4	8	4
思慮型	7	10	8	9	12	8	10	10	11	10
混合型	14	10	13	9	6	7	4	3	2	5
不定型	9	10	7	9	4	6	3	5	3	5

Table 7 は各型の実数を示したもので年少時では運動型のものは少数で12才頃を境界線として進展するようである。それと相対的に思慮型のものが多数を占め混合型、不定型は各年令において平均している。次に各型の代表的なものを2, 3示すと Fig 3 のようである。

この代表的な型を終始もち続け維持していたものは極めて僅かで男女夫々30名中運動型では男子2名、女子2名、進攻型では男子2名、女子1名、思慮型では男子7名、女子9名で、その他は幾才かの時に他の何れかの型に変動を示しつつ14才の時の型になっている。

5) 段階点の逐年的変動

同一個人が幾年か成長発達して行く間に気質性格が推移して行く有様は甚だ複雑であるが今ここで段階点が検査項目について逐年的にどの範囲で変動しているかについて観察すると Table 8 のようである。

Table 8 段階点の変動%

年 点	10-11	11-12	12-13	13-14	10-14	男	女
± 0	20.8	20.2	17.2	19.3	13.5	14.0	13.0
± 1	25.1	24.7	25.2	25.8	25.0	24.0	26.0
± 2	20.6	20.0	21.0	18.6	17.0	18.0	16.0
± 3	11.6	12.5	13.8	12.6	13.0	14.0	12.0
± 4	9.1	9.7	8.7	9.4	9.5	9.0	10.0
± 5	5.4	6.2	6.6	7.6	9.5	9.0	10.0
± 6	3.6	2.9	3.6	3.1	5.5	6.0	5.0
± 7	2.2	2.6	1.8	1.5	3.0	2.0	4.0
± 8	1.5	0.8	0.8	1.1	3.0	3.0	3.0
± 9	0.5	0.1	0.5	0.5	1.0	1.0	1.0
± 10							

Fig 3 代表的類型

である。若しそのように考えないとしたならば性格陶冶とか性格教育と言われているものを否認することになる。それであるから気質性格は内在的な要因の発達や外力によつて変化するものであるという立場から意志気質検査を10才から14才に至る5カ年間実施してその結果を要因の上から吟味したのである。

- (1) 要因の上から概括的に言うならば年少時では思慮を現わす要因が支配的であるのに対して運動の速度、決断速度の要因は比較的消極的である。12才～19才頃ではどのような要因が気質性格において支配的であるかは容易に捉えることができない。従つてそれ以後の年齢になつて始めて明確なものとなつてくると考えられる。

- (2) 類型上からは、同一型を終始維持している場合は極めて僅少で、

その他は各人各様で複雑である。

- (3) 段階点の変動は(±0～±3)の範囲の場合が多いで、従つて気質性格は狭い範囲で変化するのであつて、その小範囲の変化の累積によつて人格の或る一部を形成するものであると思われる。

参考文献

- (1) 三好 稔：教育心理学 1954 p228～230
- (2) 武政太郎：教育心理要論 1941 p119～122
- (3) 桐原葆見：精神測定 1944 p287～324
- (4) 同 意志気質検査手引 1950
- (5) 高木、城戸：実験心理学提要 古賀 統計法 1951 p174～198
- (6) 大伴 茂：教育診断学下巻 1933 p1775～1785
- (7) Downey. The Will-Temperament and its Testing 1924
- (8) E. K. Bryant. "Group Will-Temperament Tests" Journal of Educational Psychology Vol.13 1922

—1955年10月12日受稿—

この Table 8 を算出する前に検査の各項目について整理を行つて変動を見たのであるが一定の型に嵌つたような場合は大して見られなかつたが然し低学年では比較的運動速度能力を現わす項目において変動の幅が広く、精密細心を現わす場合が幅が小さい傾向がうかがわれ、その他拡張、自信等では幅広い変化が見られた。また男女差を見たのであるが殆んど一致して特に著しく目立つた場合は発見されなかつた。総体的には(±0～±3)の範囲の変動が最も多く全体の75%を示している。そして(±4)の範囲より急に減少している。してみると気質性格は例え変化するとしても逐年的には幅の狭い範囲で変化するもののようである。

V 要 約

一般に気質とは内在的な生来性素質に関する名称であつて性格とは生来性の要素と環境との輻輳によつて獲得されたものとの結合組織化されたものであると言われている。然し吾々が日常観察する児童生徒は、どこまでが気質で、どこまでが性格だと峻別することは甚だ困難である。従つて一括して気質性格として取扱うことが妥当

with each of the factors, the difference of the mean in both groups, "Success" and "Second Offense". In case of the technique (4), the figures attached to each category is optional. The technique (2) and (3) are less valid because the weight given to the categories is decided only by the percentage of "Success" or "Second Offense". It is presumable that the difference in the way of weighting categories is the main reason why we get different accuracy percentage among the four techniques.

The distribution of scores of both groups, "Success" and "Second Offense", which is on the prediction table, shows us such accuracy percent-

ages as follows: t. (1) 84%, t. (2) 79%, t. (3) 82%, t. (4) 80%. This means that there is no significant difference among the four techniques, and that the figures do not coincide with the theoretically calculated results mentioned above. The latter is due to the fact, I presume, that the distribution of scores of both groups does not show the normal probability curve as the surveyed subjects are rather few in number. In order to make a strict comparison of the accuracy percentage, it will be necessary to apply the quantified categories to the new samples which have not been used in their quantification.

A FACTOR-ANALYTICAL STUDY ON THE WILL-TEMPERAMENT TEST

By Kuba, Tadatoshi

Yamaguchi University

Generally the term "Temperament" is used to denote all the native qualities, and "Character" is said to be a united organization produced from the native factors and environments. But from our daily observations on school children we find difficulty in discriminating how far the will temperament goes and how far the character does.

Therefore it is proper to deal with them as one thing under Will-Temperament. If we deny this thinking it means we would deny the character training or character education. From the standpoint of that Will-Temperament is effected and changed by the outer forces, I studied the analysis of Will-Temperament from its factors by testing the children aged from 10 to 14 years old, for 5 years and here is the result.

(1) In the younger stages the factor showing thinking is dominating while the speed of movement, speed of decision are comparatively negative. From 12 to 14 years old it is very difficult to know what factors are dominating in Will-Temperament. It depends on the further studies to make this point clear.

(2) From the view of classification there are very few cases when the same type is kept on to the end. Each individual shows a different type, and they are very complicated.

(3) There are many cases of the change of stages ($\pm 0 \sim \pm 3$), therefore the change of Will-Temperament is done in a small range; and the accumulation of the changes forms some parts of the character and temperament.